タイ・ルーの移住と精霊祭祀［概況］
―北タイを中心に―

馬場雄司

はじめに
1　北タイにおけるタイ・ルーの概況（移住史と精霊祭祀）
（1）パヤオ県
（2）ランパーン県、ランプーン県
（3）チエンマイ県
（4）チエンラーイ県
（5）ナーン県
（6）中国の社会主義化による難民
（7）ラオスの社会主義化による難民
（8）かつてタイ・ルーであり、現在は”そうではない”と表明するもの
2　北ラオスにおけるタイ・ルーの概況
（1）分布の状況
（2）移住史と精霊祭祀
まとめと展望

はじめに

東南アジア大陸部に分布するタイ系民族のうち、今日の中国雲南省西双版納タイ族自治州を中心として分布しているのが、タイ・ルーである。

タイ・ルーは、この西双版納に新中国成立まで、シプソーンパンナーという王国を築いていた。このシプソーンパンナー王国は、１３世紀より成立した北タイのランナー王国と近縁関係をもっていた。東南アジア大陸部には、山間盆地を基盤とし、世襲的首長を中心として政治的に統合されたムアンという領域がみられる。シプソーンパンナーは、３０あまりのムアンの首長の上に君臨するツァオペンディンという王を中心とする統合体として知られるが、ランナー王国を建設したマンラーイ王の母は、シプソーンパンナーの中心ムアン、ツェンフンの王女だといわれる。また、シプソーンパンナーの仏教は、ランカーウォンと呼ばれる南方上座仏教の

一派であるが、これは、チエンマイから現在のミャンマー・シャン州にあるケントゥンを経由してもたらされたものである。

１５世紀から１８世紀に至る間、ランナーとシプソーンパンナーは共にビルマ王朝の支配下におかれる。１８世紀末、ランパーン出身のカーウィラが、バンコクの王朝（トンブリ、ラタナコーシン）の援助を受けてビルマ勢力と戦い、ランナー王国が復興する。この際、戦争で荒廃した北タイを再開拓する為に、周辺のタイ系諸民族が移住させられた。北タイのタイ・ルーのほとんどは、この時期に移住したものである。

ランナー王国の民をタイ・ユアンと一般に称するが、タイ・ルーとタイ・ユアンは、同系統の仏教を信仰する他、言語の類似性をはじめ、モチ米食など文化の諸側面において、元来、類似する点が多い。北タイに移住したタイ・ルーは、 百年以上を経た現在、マジョリティーであるタイ・ユアンに同化し、更に、タイ国近代の国民形成の過程で、共に中央の影響を受けている。従って、今日では、タイ・ユアンとタイ・ルーの日常生活においては、大きな文化的差異はみられ、わずかに残る言語的特徴や、織物などにその特色が残されているのみである。ただ、彼らの守護霊儀礼にその移住の歴史がしばしば表現されており、そのことがタイ・ルーとしてのアイデンティティーに結びついている場合が多い。北タイに移住したタイ・ルーは、シプソーンパンナーの様々なムアンを出自としており、この出身ムアンの守護霊を祀ることで、移住の歴史を表現しているのである。また、北タイの多くの村落には、ピーバーン［＝スア・バーン］（村落の守護霊）が祀られるが、多くのタイ・ルー村落では、出身ムアンの守護霊はピームアンとして、ピーバンとは別に祀られている。

筆者は、これまで、タイ・ルーの移住と精霊祭祀についての研究を継続してきたが、とりわけ、守護霊儀礼に移住の記憶が留められる点に注目してきた。タイ・ルーは、北タイ全体に広く分布しているが、その中でも特にナーン県ターワンパー郡を中心にしてフィールド調査を行ってきている。

特に筆者が移住と守護霊儀礼について扱ったものとしては、ナーン県ターワンパー郡の３カ村のケーススタディーがある。この３カ村は、シプソーンパンナーの東部、ムアンラーから移住したもので、チャオルアン・ムアンラーという守護霊を３年に一度合同で祀っている。近年、この儀礼は村起こしに用いられ、観光客をも意識したものとしてイベント化されている。筆者の関心は、こうした状況における、農村開発における儀礼の用いられ方にある。守護霊儀礼は、近年、村起こしという文脈で、織物と共にタイ・ルーのシンボルとして強調されている。こうした際、とりわけ、自らの出自に対する意識が高まり、移住の歴史を明確化しようとする動き

が起こる。また、現在の状況をより有利に語る為に歴史の再編・創造が行われることもある［馬場 1995］。

このように、筆者は、特定の地域に絞って記述し、考察をしてきたのであるが、北タイには、この他にも、多くのタイ・ルーが分布している。筆者も、上記のナーン県の事例と、チエンラーイ県メーサイ郡やパヤオ県チエンカム郡の事例との比較を試みたことがあるが［馬場 1993a］、タイ・ルーの移住の全体像は、こうした諸地域のタイ・ルーに関するデータを網羅して初めて概観することができるのである。筆者は、地域を限定して集中的にデータを収集してきたものの、折に触れ、様々な地域のタイ・ルー村落を訪れたり、報告書を収集したりしてきた。ここでは、これらのデータに依拠して、これまで、記述してこなかった地域のタイ・ルーの移住に関するデータをもあわせて紹介することにしたい。その中で、精霊祭祀について得られた資料についても紹介することにする。先に述べたように、北タイに移住したタイ・ルーは、精霊祭祀において、精霊にまつわる伝承や儀礼の過程に、移住の歴史が表現されている場合が多い。移住の歴史を直接表現する文書や伝承からは、当時の移住の実態を復元することが可能であるが、精霊祭祀において表現される歴史は、彼らの「歴史」に対する意識について考えるための重要な資料と成りうると考えられる。

具体的には、パヤオ県、ランパーン県及びランプーン県、チエンマイ県、チエンラーイ県、ナーン県、におけるタイ・ルー村落の状況を、県別にとりあげる。その際、移住に関する歴史についての記録が文書の形で存在している場合は、その全訳もしくは概要を、口頭伝承の形で伝えられている場合は、その内容を記述する。北タイにおけるタイ・ルー村落を全て訪れてのものではなく、精霊祭祀の実態について知りえた情報は、現在の所、必ずしも多いとはいえず、その内容の詳細さにもばらつきがある。データは不十分であるが、現在、知りえた限りでの情報を可能な限り示すことにしたい。

１９世紀から２０世紀にかけての歴史の中での移住がどのようなものであり、またそれがどのように精霊祭祀に反映されており、そのことが現在どのような意味をもつのかという点について概観し、そこから得られる今後の研究における展望を述べてみたい。

なお、資料の記述の方法については、次のようにする。

（1）筆者が収集した資料に関しては、各資料の末尾に収集年、収集場所を示す。

（2）報告書等、文献資料からの引用の場合も、各資料の末尾に出典を示す。

1　北タイにおけるタイ・ルーの概況（移住史と精霊祭祀）

（1）パヤオ県のタイ・ルー

a．チエンカム郡

移住史

仏暦２３９９年、ナーン土侯であったプラチャオ・スリヤポンパリデートは、兵を挙げて、チエントゥンの征討に向かった。そこで、勤勉で平和を愛するタイ民族に出会った。しかし、雲南系漢人（チンホー）の影響下におかれ、迫害されていた。ナーン土侯は、タイ・ルーをチンホーの影響下から解き放つことを決意した。ナーン土侯は、最初、タイ・ルーをチエンムオンに移住させた（仏暦2416年。当時はナーン県）、彼らは１５年間そこに住んでいたが、チエンムオンの土地が痩せているので、他にふさわしい場所を探した。その結果、ラーオ川、ユアン川などいくつかの川が流れるチエンカムに移住することにし、ナーン土侯にその旨を告げた。

仏暦２４３１年、タイ・ルーの人々は、チエンムオンから移住を始め、以下のような村を作った。　ユアン、タートソブウェーン、マーン、トゥンモーク、チエンバーン、ペート、ウェーン、　デーンムアン、ドーンチャイ、ノーンルー、サーイ、ホイファイ、ノーンラオ、ラー、サン　プールーイ、ソブボン、シープム、チエンカーン、パーンウア

ナーン土侯、プラチャオ・スリヤポンパリデート（仏暦2434-2461 、ラーマ５世、ラーマ６世時）は、次のような事蹟を残した。

仏暦　2369　チエントゥン征討軍を出す。

2398　パヤールアン・バンコムとパヤームアン・チエンルンを国王の元に連れていく。

2399　ホー族の影響下にあったシプソーンパンナーのタイ・ルー7000人がチエンカムとチエンムオンに移住させる。

2428-2430　第３次、第４次ホー族平定戦において出兵

2461　５月５日、卒す。

（タート村のアピワン・ソムリット氏の口述を
ソムロット・シーチャン氏が筆記した記録）［1990年８月、ユアン村］

精霊祭祀（村落名［出自ムアン／守護霊の名］）

ユアン村［ムアン・ユアン／チャオポー・メーン］

毎年６月、３日間、儀礼を行う。米飯をチャオポーに捧げ、村の中の安全を祈る。個人に関

することから、自然、洪水に関することなど、様々な事柄を祈る。司祭を介して、何が危険かを告げる。儀礼の際には、ターレオ（呪標）を立て、その内側の領域には、司祭以外入ってはいけない。もし、入れば、病気になって死ぬ。

祠の前の祭壇には、儀礼の際に、たけのこ、ラープ、ゲーンなどを並べる。

［1990年８月、ユアン村］

第二次大戦の頃、ユアン村の人が精霊に花を供えて祈ったら、風が吹いてイギリス軍が全滅した。［1992年９月、マーン村］

チエンバーン村［ムアン・ポン／チャオポー・パヤーチャーンプアク］

［守護霊の由来］

ムアン・ポンのチャオムアン、ターオクンセーンテープがパヤーチャーンプアクを、現在、祠のある場所に招き、チェンバーン村の人々に幸福をもたらした。とりわけ、災いに会って困っている人を救い、他の人々も、災いから免れた。チエンバーン村の人々は、こぞって白象を象った記念物をこしらえた。チャオポー・チャーンプアクは尊敬されるものとして、巡礼の対象となっていき、インドのブッダガヤの大切な土が像の中に入れられた。

（白象の像の由来を示す掲示板の文）［1990年８月、チエンバーン村］

［儀礼に関する雑情報］

儀礼においては、ラープ、豚、ろうそく２本、酒を捧げる。白象の像の他に、スア・バーンの祠があり、鶏が捧げられたが、現在はなし。［1990年８月、チエンバーン村］

チエンバーン村の人は、ムアンポン→チエンムオン→チエンカムという経路を辿っていった。パヤー・チャーンプアクはピー・ムアンである。ムアンヨーンにもチャーンプアクがあるという。このことは、カプ・ルー（タイ・ルー民俗歌謡）の中にも出てくるのでわかった。仏日（ワン・プラ）には、守護霊は降りてこないので、儀礼を行ってはいけない。守護霊が降りると、その印として、鳥肌が立ち、寒気がする。かつて、儀礼は、１１月（タイ・ルー暦）に行われた。黒豚を供犠する。１１月は、雨がふるので、現在は、７月（タイ・ルー暦）に行う。儀礼の費用として、世帯ごとに、１０バーツを徴収する。バンコクに出稼ぎにいっている者も寄付できる。寄付集めは、村落委員会が行う。霊媒はいない。メーティーナン（霊媒）は、ターウィラートという守護霊については、存在する。チャイバーン（村の基柱）の儀礼は、ソンクラーンの時に、ソンクロ（邪気を払う）が行われる。僧がやってきて、経典を読むのである。チャオポー・チャーンプアクは、チエンダオの洞窟から来たともいわれ、チエンバーン村の他、

トゥンモーク村、ペート村の者も信奉する。プリーストの家に、この守護霊の棚（依代）があり、願いごとがある人があれば、家に上がって祈る。（カム・エン氏［チャオポー・チャーンプアクのプリースト経験者］による）　［1992年３月、チエンバーン村］

トゥンモーク村［ムアン・ポン／チャオポー・マーカオ］

女性は祠の領域内に入ってはいけない（‘チャオポー’は男性なので）。女性は別の所へ花、弁当をもって集まる。１０バーツないし２０バーツを捧げる（シア・カー・ピー）。５月に儀礼を行い、黒豚を供犠する。　［1990年８月、トゥンモーク村］

マーン村［ムアン・マーン／チャオルアン・マーン］

チャオルアン・マーンのモニュメントが存在。馬に乗った戦士の形をしている。

［モニュメントの文章（３つの面に記される）］

面１　国会議員チェーワン・ウォンヤイがチャオポー・ムアンマーンの祠を建立した。

仏暦2517年11月23日

子々孫々、大切に伝えていくことを願う。

プラパン・ウォンヤイがチャオポー・ムアンマーンのモニュメントを建立した。

仏暦2527年４月１日

費用　12,000バーツ

ポー・パヤールアン・ムアンマーン

われわれの故郷の地からやってきたタイ・ルーの祖先

面２　ムアン・マーンの守護霊の順位

ポー・パヤールアン・カムカート

チャオマリワート・サーイワン

チャオオックダーン・カムルー

面３　チャオチョムファーン　ナーンチョームクライ

ポーパヤールアンチャン　　忠節にして恩を知る

［1992年３月、マーン村］

［儀礼］

毎年８月に黒豚を供犠し、３年ごとに水牛供犠を行う。霊媒はかつてはいたが、今はない。チャオルアン・マーンを祀って、７日後にスア・バーンを祀る。スア・バーンには、豚と鶏が

供犠される。チャオルアン・マーンの儀礼には、現在、プーヤイ・バーン（村長）の父がチャオムアンに扮装して登場する。かつては、儀礼にこのような登場人物はなかったが、３年前（1989年）から始められた。　［1992年３月、マーン村］

［プリーストの移住経路］

シプソーンパンナー、チエンフンのティウ村から移住。途中、ムアンヘ（現在、シャン州）に30年間住む。この間に、ムアンヘ出身の現在の妻と結婚する。後、ムアンユーに７年住み、メーサイに10年あまり住んで、商売のためチエンカムに移住。　［1992年３月、マーン村］

ペート村［ムアン・ポン／チャオポー・パヤーカムデーン］

馬に乗った西洋人風紳士のモニュメントが作られており、北タイ暦１１月白分１１日に祀る。チャオポー・ヤータオを２日後に祀る。チャオポー・チュータラーもあり。川を守護する役割をもち、病気などから守る。チャイ・バーンがペート寺の門の脇にある。チャオポー・パヤーカムデーンはペート村の全戸（290）が祀る。チエンバーン村のチャオチャーンプアクにも拝みにいく。

［儀礼－1992年９月の事例］

８時頃、ワーマイで新しいカオチャム（プリースト）を選ぶ。鶏を100 匹あまり供犠。気絶させた上、釜ゆでにする。９時頃、カオチャム、供物をテワダーに捧げて祈る。ワーマイによって満足か否かを確かめる(1)。　［1992年９月、ペート村］

ノーンルー村［ムアン・ポン／チャオファー・プーカム、チャオセーンスク
セーンムアンルアン、セーンムアンノイ］

ムアンポンから来たチエンカムに移住する時、指導者がおり、セーンルアンと呼ばれた（プーヤイバーン［村長］のような地位）。

４柱の守護霊は、北タイ暦８月（９月）に、３年ごとに行われる。黒豚が供犠される。［チャオファー・プーカムについて］

チャオファー・プーカムの祠、ムアンラーのドーイプーコーのふもとに西向きに立っている。チャオファープーカムは、とりわけムアンラー、ムアンポンの人々の信仰する神であり、尊敬されている。チャオファープーカムの祠を通るときには、赤い道具はしまわなくてはいけない。チャオファー・プーカムの森の領域には、３つの祠がある。真ん中がチャオファー・プーカムの祠で、水とビンロウを入れた器を毎日捧げなくてはならない。チャオファー・プーカムの左

にいるのは、パヤー・ルアンモーク（モークは大砲の意）で、右側にいるのは、セーンムアンルアンである。このセーンムアンルアンは、ナーン県ターワンパー郡のN村で信仰されている、チャオルアン・ムアンラーである(2)。　　[1992年３月、ノーンルー村]

ウェーン村、ナムウェーン村、ウェーン・パッタナー村、ラー村

[ムアンラー／チャオルアン・ムアンラー]

[４カ村の移住史]

1937年、ナーン県ターワンパー郡のN、D、T村（ムアンラーから移住）からの移住者がナムウェーン村を立て、更にそこからウェーン村（1963年）とウェーンパッタナー村（1972？）が分かれた。ウェーンパッタナー村の者はN村の親族が多い。ラー村はラオスのムアン・コープから直接移住した者が建てた。　　[1991年１月、ウェーンパッタナー村]

[儀礼－１９９１年１月の例] (3)

ウェーン村

儀礼場が大通り近くの広場に存在。チャオルアン・ムアンラーの祠を中心に、守護霊達の祠が設けられている。

初日にターレオを立てて、村の門を閉じる。二日目、花、線香、蝋燭、モチ米を村人たちが持ち寄る。チャオルアン・ムアンラーと各自が祖霊として拝む守護霊に捧げる。午後から夕刻にかけて、闘鶏や賭博など娯楽。

ナムウエーン村

村の裏側の小川の横に儀礼場が存在。チャオルアン・ムアンラーの祠を中心に、守護霊達の祠が設けられている。初日にターレオを立てて、村の門を閉じる。二日目、村人が蝋燭、もち米などの供物を運び、チャオルアン・ムアンラーと祖霊として拝む守護霊に捧げる。白豚が供犠され、チャオルアン・ムアンラーを始めとする守護霊に供物を捧げてのち、男女チャーンカプ（歌い手）によるカプ・ルー（タイ・ルー民俗歌謡）。

ウエーンパッタナー村

ウェーン川近くの広場に儀礼場があり、チャオルアン・ムアンラーとその従者の一部の祠が設けられる。寺院の境内にタイ・ルー文化保存のため建てられた「伝統家屋」が存在。儀礼の前夜、チャオムアン（儀礼的首長）の宿所になる。初日、早朝、村人がタイ・ルーの家屋へ。昼間は、境内でレクリエーション。夕刻、行列をつくり、チャオムアンが儀礼の用具を持ち、タイ・ルーの家屋から儀礼場へ。チャオムアンは赤い花を入れた器を捧げ持ち、行列の先頭を

行き、チャオルアン・ムアンラーの祠に到着すると、儀礼具を捧げ礼拝。チャオムアンを儀礼場にある宿所に送る。夜、チャオムアンの宿所付近で、男女のチャーン・カプによってカプ・ルーが歌われる。二日目、早朝、村人、儀礼場の周囲に集合、めいめい花、線香、花、ろうそく、モチ米を持ち寄り、チャオルアン・ムアンラーと自分の祖霊としての守護霊を拝む。黒豚を一匹供犠、守護霊それぞれに供物を捧げる。ターウィラート（スア・バーン）の前で、満足したかどうかの占い。後、チャオルアン・ムアンラーの祠の前で、カプ・ルー。タイ・ルーの踊りなどの他、各種の遊戯。次いで、チャオムアンを家へ送り届ける。

ラー村

恒常的な儀礼場はなく、村の寺院の隣の広場を利用。チャオルアン．ムアンラーの恒常的な祠もなし。チェンマイから来たとされるタイ・ルー以外の出自の守護霊も存在する。フォーン・タイ・ルーの他、フォーン・レプ（爪の踊り）も踊られる。村の入り口にターレオを立てて村を閉ざすが、罰金の名目で３０バーツ支払えば村外の者も立ち入り可能。

ｂ．チエンムオン郡

移住史及び精霊祭祀

ターファー村の村人は、ナーン県のターワンパー郡とチエンクラーン郡から移住した。故地は、ムアン・ポン、ムアン・ラー、ムアン・マーンである。チャオ・ムアンポンと呼ばれる精霊が、ペート村で祭祀され、トゥンモーク、パーケム、マーン、ターファーの４村も拝む。先住のタイ・ユアンの人々もタイ・ルーがこの地に移住してからは、この精霊を拝んでいるという。先住のタイ・ユアンは、パヤー・チャーンプアク、チャオパヤーハーン、チャオパヤー・カムピンという精霊を祀ってきた（これらは兄弟）。タイ・ユアンの村である、トゥンノーン村ではパヤーチャーンプアクが、サ村ではチャオパヤーハーンが祀られるが、チャオパヤー・カムピンは、チャオファー・ムアンキンとも呼ばれ（昔、ここにキン村というタイ・ユアンの村があった）、タイ・ルーの村ターファー村のスア・バーンとなっている。祠には、屋根がないが、これは精霊が屋根を好まないからだとされる。毎年、北タイ暦６月に儀礼が行われるが、１年目に豚を供犠し、２、３、４年目には鶏を供犠する。そしてまた、豚を供犠するというような、サイクルで供犠が行われる。ターファー村の村人はムアンラーから移住したという説もある。

［1990年９月、ターファー村］

（２）チエンラーイ県のタイ・ルー

a．チエンコーン郡

ホイメン村(4)

移住史

1886年、我々の先祖は、ホー族との戦いにより、シプソーンパンナーのムアン・ウー・ヌアのボー村から逃亡してきた。彼らは、ムアンラーに一年滞在し、チャオムアン・チエンコーン（チャオムアン・ナーンの支配下）の領域の境界にあるドーイ・ラックカム（ボーテーン）に到達した。チャオムアン・チエンコーンは、兵士を差し向け、我々の祖先と会わせ、彼らを二つのグループに分けた。

一つのグループは、トゥンモット村を建て、もう一方は、トゥンドゥック村を建てた。両グループとも、それぞれ２年程滞在し、一緒になってホイメン村を建てた（1889年）。そこは、自然の資源に恵まれていた。２年の後、ターファー村（ラオス領内）が、10年の後、ターカム村が、20年後、ポン村が、１５年後、サンブンルアン村が、それぞれホイメン村から分かれた。

（ホイメン村住民ソウェーン・チャンタカート氏の所蔵文書［タイ・ルー語］による）

［1990年10月、サンブンルアン村］

精霊祭祀

チエンコーン郡のホイメン村、ターカム村、シードンチャイ村とメーサイ郡のサンブンルアン村は、チャオルアン・ボー・クルアを祀っている。儀礼は、年に５回行われている。北タイ暦２月に３回（それぞれ魚、魚、豚という順で供犠が行われる）、８月に２回（それぞれ豚、魚が供犠される）。［1990年10月、サンブンルアン村］

ハードバーイ村

移住史

第二次世界大戦の後、ムアンレム方面やムアンヨーン方面の各地からメコン川を下って移住。村人、ポープイ・タンマウォン氏夫妻は、１９３５年、インドシナにおける戦争の影響で、ラオスから移住した。シプソーンパンナーからラオスに移住したのは氏の祖父の代だという。祖父は、ムアン・パークター（場所不明）の領域内で、ハートサート村からホイカン村へ移住したが、ピー・カ（悪霊）が多く住めなくなったので、その村人と共にタイとラオス国境付近に移住し、ナムクーン村を建て、20年間在住したという。氏はここで生まれた。そして、インドシナにおける戦争の影響で、ハードバーイ村へ移住したという。ナムクーン村は大きな村で、そこから分かれてタイ領内へと散らばっていった。ハードバーイ村とソプカム村がその主なも

のである。ハードバーイ村は、最初６０軒程であったが、現在は２５０軒を数える。また、中国の文化大革命の時に、西双版納から逃げてきた人がいる。現在は、タイ国民のIDカードを所持している。

［1992年３月、ハードバーイ村］

精霊祭祀

村落の守護霊として、ドゥーカイチェーを祀る。北タイ暦８月白分７日に５バーツづつ集める（一軒ごと）。鶏を供犠。４０過ぎの未亡人の霊媒がいる。ドゥーカイチェーは５人兄弟の末子。チエンラーイ県メーサイ郡のマイロンコン村にいるチャオルアン・カムデーンはシプソーンパンナーから来たとされ、その霊媒がハートバーイ村に住んでいる。

［1992年３月、ハードバーイ村］

（３）ランプーン県及びランパーン県

移住史

１７７１年、ランナー王国を再興したプラヤー・カーウィラは、ムアンヨーン（現在、ミャンマー・シャン州）とシプソーンパンナーを攻撃し、ランプーン、ランパーンにタイ・ルーの人々を入植させた。ムアンヨーンからランプーンに移住したタイ・ルーは、自らをタイ・ヨーンと称した。ランプーン県でタイ・ルーを名乗っているのは、ムアン郡のティ村のみで、その他は、タイ・ヨーンと称している。

精霊祭祀

精霊祭祀に関する情報は、現在、得られていない。

以下、ランパーン県のタイ・ルー村落を以下に示しておく。

ムアン郡	クルアイ・ペ	クルアイ・ファーイ	クルアイ・ルア
	クルアイ・クラーン	クルアイ・ムアン	
ナムチョー郡	メープン　ホーンハー		

［Prachan Rakphong　1987］

（４）チエンマイ県

ａ．ドーイ・サケット郡

ムアンルアン村（ムアンルアン・ヌア村、ムアンルアン・タイ村）

移住史

ムアンルアン村は、シプソーンパンナーにおけるメコン河西側にあるムアンルアンから移住

したものからなる。彼らは、13世紀、プラチャオ・サムファーンケーンがランナーの王であった時にこの地に移住した。 [Ratanaphon Sethakun lae Khana 1984]

[1990年7月、ムアンルアン・ヌア村]

b．サムーン郡

メーサプ村（メーサプ・ヌア村　メーサプ・タイ村）

移住史

シプソーンパンナーにおけるメコン河西側のムアンルアン、ムアンツェー、ツェンフンから移住したものからなる。プラヤー・カーウィラの弟がランナー王国を統治していた、1812年に移住したとされる。

精霊祭祀

1．チャオヌアホア　2．チャオヤプン　3．チャオヤカード　4．チャオヤケーオ

5．チャオチュムチャ　6．チャオノーイコンケーオ　7．チャオドンナン

（チャオヌアホアはチエンダオの洞窟に住む、ランナー王国最大の守護霊チャオルアン・カムデーンの兵士と考えられている）[Chutamat Somkanok and Phichet Anukun 1990]

[1990年9月、メーサプ・タイ村]

（5）ナーン県

ナーン県のタイ・ルーに関しては、ラタナポーン・セータクン氏の網羅的な調査がある。以下、これに基づき、タイ・ルー村落を故地を同じくするものごとに紹介し、祀られる守護霊も合わせて記すことにする（故地、村名、守護霊の順に示す）。

a．概観(5)

ターワンパー郡

ムアンラー	N、D、T	チャオルアン・ムアンラー
不明	シアオ	チャオルアン・チョムチェーン
チエンラープ	ロムクラーン ノーン	チャオルアン・チエンラープ
チエンヨーン	トゥンコーン	チャオルアン・チエンラープ
ムアンユー	ユー（ヨム区） ユー（チョームプラ区）	チャオルアン・カムデーン
ムアンゴープ	トーン	チャオルアン・チエンラープ

ムアンヘ	へ　フアク	チャオルアン・ムアンヘ
プア郡		
チエンセーン	ナーカム	チャオルアン・プーカー
ムアンヨーン	ドーンチャイ（シラーペット区）	
	ドーンチャイ（シラーレーン区）	チャオルアン・チエンルン
	トゥンラッタナー	チャオムオックカム　チャオカムキアオ
	ドーンチャイホアナム	
	ファーイ	ナーンヤイ　バーンミー
	ホアドーイ	
	ナーパーン	チャオルアン・プーカー、ピー・ムアンラー
	ドーンケーオ	チャオポー・パヤーケーオ
	プラーン	
	コーン	チャオルアン・ソプルアイ
	パーラーン	チャオファーラオ
ムアンレーン	パートーン	チャオルアン・プーカー
	トゥンシーブーンユーン	
	モーン	チャオカオクアンチャオパヤーパーノーン
	ローンゲー	チャオ・チャーンプアク・ガーキアオ
	ケート	
チエンルン	ティーントック	ピー・ムアングン　ナーンヤイ　バーンミー
	フイ	
バーンローン	ドーンケーオ	チャオポー・パヤーケーオ
チエンラープ	サンティスク	ピー・ムアン・チエンラープ
チエンクラーン郡		
ムアンヨーン	ラオ	
	チエンケーン　オー	チャオファーノーイ　ピー・メーン
チエンセーン	ノーンデーン	チャオルアン・セーンター
		チャオルアン・ソムヨット
		チャオポー・ナムチャム
ムアンレーン	チエンドーム	

チエンロム　　シーウドム　　チャオファーノーイ
不明　　パーギウ　　チャオポー・コームーレック
トゥンチャーン郡
ムアングン　　ラーイトゥン　　[Ratanaphon Sethakun 1993]

以上の概観をもとに、以下、筆者が収集した資料を郡別に示す。

b．ターワンパー郡
N村、D村、T村
移住史
[ムアンラーよりナーンへの移住史]
小暦（チューラサッカラート）1225年（西暦1863年）酉年、7月、白分5日、火曜日、プラヤーチャイウォン、セーンルアンタンマラート、セーンピロムとセーンマノーカーン。
私たち、ムアンラーの年長者は挙げて（ナーン王）陛下に謹んで拝み奏上致します。我々、（ナーン王）陛下のお御足にいるもの共は、ムアンラーから逃げてまいり、ナーンの王様の庇護の元にあります。そもそもことの始まりはこのようでありました。ムアン・シプソーンパンナーに関していえば、チャオ・マハーワンとチャオ・モムノーイという叔父と甥が小暦1184年から争いをしており、シプソーンパンナーは二派に分かれております。メコン川の東岸にはムアンラー、ムアンウータイ、ウーヌア、ムアンチエントーン、ムアンバーン、ムアンリーンがあり、これらは全て、チャオ・モムノーイの側にあります。チャオモムノーイの使者が、白い傘のラーンサーン王のもとへ行き、チャオモムノーイ側の為に、兵力を貸してくれるよう頼みました。ラーンサーン王は兵を起こして、ムアンラーに三千の兵を置きました。チャオアチッタウォンは、その時、チャオラージャブットと呼ばれており、チャオチャイウォンはチャオカムモンと呼ばれていました。チャオラージャブットとチャオカムモンは、ムアンルアンプーカーのパークゲーンに居ました。チャオモムノーイはといえば、金一万をパヤーアリンとラージャーチャイウォンに渡し、ラーンサーン王から象を買いに行かせたと言いました。パヤーアリンとラージャーチャイウォンがチャオラージャブットと出会って話したことによれば、ラーンサーン王から、確かに金一万で象を買いに行くということです。しかし、もしパヤーアリン達が金一万を出せば、私たちナーンの者は、象六頭を用意することができます（何もわざわざラーンサーンに行く必要はありません）。チャオラージャブットはターオローカーにこう言って、

チャオモムノーイの使者をナーン王に謁見させました。そしてナーン王は、象六頭を与えました。ラーオの軍隊三千、ナーンの軍隊七十は、チャオモムノーイの側につきました。チャオモムノーイは金一千と馬一頭をナーン王に差し出し、皆が揃ってチャオマハーワンと戦うよう頼みました。即ち、ルー、ラーオ、ナーンが揃って約束し、６月の満月の日にマハーワンと戦いを始めました。六月黒分２日に、マハーワンと、ルー、ラーオ、ナーンは戦いつつ、ムアンラーへたどり着きました（優勢を誇るマハーワンがルー、ラーオ、ナーンの軍をムアンラーまで押していった）。ムアンラーの者達が逃げてきたのは、その時なのです。チャオカムモンも逃げましたが、まだレム川の河口で休んでいました。するとマハーワンの兵士達が後方から攻め掛かってきました。チャオカムモンとチャオラージャブットはそこで破れ去り、散り散りとなりました。チャオラージャブットはムアンラーの兵や民と共にナーピエンサーンへ逃げてきました。そしてそこで、雌象二頭、雄象一頭、馬一頭を捨てました。兵を動かしてボールアンにたどり着き、そこでムアンラーの民もそこで休みました。チャオラージャブットはチャオムアンラーの援軍を頼みました。チャオムアンラーも二百の兵を用意しました。ターオナンタセーンとムーンテープが首領となって兵を起こし、ナーピエンサーンへ象を探しに行きました。ムアンラーの軍は象を捜し出し、象二匹、馬一匹をボールアンのチャオラージャブットの所へ届けました。チャオラージャブットは象を得て後、ナーンの兵をまとめてその日のうちに逃げ出しました。一方、ムアンラーの兵と民はそこ（ボールアン）で休んでいました。そこへマハーワンの軍がやってきて、ムアンラーの民と出会いました。マハーワンの軍とムアンラーの兵と民は昼夜戦ってのち、引き上げました。マハーワン（ムアンラーの兵・民の誤り？）も散り散りに森へと逃げました。ある者はラオスへ、ある者はラージャブットの象と共に逃げ、ターンセーンにいるラージャブットのもとへやってきました。ラージャブットはそのチャオ（チャオムアンラー？）と一緒に過ごす為、そこに一晩泊まりました。明るくなったら（夜が明けると）チャオラージャブットはターセーンの兵をまとめてターカードに泊りました。ムアンラーの民もターセーンに五泊し、六泊目にチャオカムモンもどこから来たのかはっきりとしませんが、ターセーンのムアンラーの人々に会いに来ました。そして、ムアンラーの首領（チャオムアンラー）と民を、ナーン王に会わせました。ムアンラーの人々には、生きて行く為の土地がないので、与えてくださるよう、謹んでお願いをしました。チャオアチタウォンというお方はムアンラーの民の状況を了解なさると、ムアンラーの首領と民を連れて行き、ファーイクムシンという堰をつくりました。二人のチャオ（チャオアチタウォンとチャオカムモン）のおかげで、ムアンラーの人々は、普通に食べて行けるようになりました。こうして、ムアンラーの人々は、

チャオラージャブット（チャオアチタウォン）とチャオカムモンの恩恵を実感しました。そして、田畑を耕し、これらのチャオ達に捧げました。チャオマハーウォンというお方が王位につくまで長い間ナーンに留まりました。畏れ多くもそのナーンの王様（チャオマハーウォン）がチャオチャイウォンムアンラー（ムアンラーの民の首領）におっしゃるには、チャオチャイウォンムアンラーを連れて、バンコクのチャオプラーサートーン（ラタナコーシン王朝の王）を訪れるとのことでした。何故なら、王様陛下は（タイ・ルーの人々がナーンに移住したというニュースを聞いて）タイ・ルーの人々にいろいろ関心をお示しになったからです。チャオルアンマハーウォンがチャオムアンラーをバンコクへ連れて行きました。そして、チャオムアンラーを挙げてパヤーラーとし、他の数々のムアンと同様、ホワムアンとしました。そして、ムアンラーの人々に、金二千を供出させ、一千はチャオパヤーワンクワーに捧げ、一千は、チャオカムモンに捧げました。チャオパヤーワンクワーは受け取られましたが、チャオカムモンは受け取られませんでした。チャオカムモンは以下のようにおっしゃいました。自分は象牙と槍を持ってきただけで大したことはしていないので、報酬はいりません（偶然、出会っただけである）。自分はチャオルアンマハーウォン陛下があなたたちを挙げて他の数多くのムアンと同様、ホワムアンとしたということはめでたいことです。ほんとうにどうやって表現してよいかわからない程めでたいことなのです。かのお方は、ムアンラーの首領と民に祝福を与え、金一千をムアンラーの人々に返しました。これが話の全てであります。どうかお伝え下さいますよう。

（　）内は筆者の注記（N村の元教師所有のタイ・ルー文書による）

［1991年９月　N村］

精霊祭祀　チャオルアン・ムアンラーの儀礼(6)

３カ村が３年に一度チャオルアン・ムアンラーを合同で祀る。約20の親族の守護霊が３カ村に分布しており、儀礼の際に、N村にある儀礼場に集められる。儀礼場には、チャオルアン・ムアンラーの銅像が立てられており（1985年に建立）、親族の守護霊の祠はそこに集められる。これらの親族の守護霊は、チャオルアン・ムアンラーを筆頭軍団がイメージされており、戦乱による移住という歴史が表現されている。儀礼では、ムアンラー首長（チャオムアンラー）の子孫（代々D村に住む）がチャオムアンを演じ、チャオルアン・ムアンラーのプリースト、モームアン（代々N村に住む）と共に、重要な役割を果たす。

［儀礼－1990年12月の例］

初日：N村の村人が、D村のチャオムアンを向かえにいく。チャオムアンの家では、男女のチャーンカプ（タイ・ルー民俗歌謡の歌い手）がカプ・ルーを歌う。夕刻、チャオムアンはN

村に到着し、モームアンと共に象神の祠と馬神の祠で祝詞を唱える。バオモー（モームアンの助手）と共にチャオルアン・ムアンラーの銅像のある祭壇で祈りを捧げる。

二日目：ターレオを立て、村を閉ざす。村外の者が入るときは、罰金の名目で10バーツ払う。チャオムアンとモームアンは、婦人会などによるタイ・ルーの舞踊やドントゥリー・プンムアン（北タイ民俗音楽）の演奏を伴って、儀礼場へと向かう。途中、チャオムアンとモームアンは、象神と馬神の祠で祝詞を唱えて、鶏を放つ（供犠の代わり）。儀礼場に到着すると、チャオムアン、モームアンが祭壇に供物を捧げる。モームアンは祝詞を唱え、守護霊達の祠の前で鶏を放つ（供犠の代わり）。次いで、祭壇横の広場で、柱に繋がれた水牛、牛、白豚、黒豚を、バオモー一人が踊りながら竹ひごをあて、次いで、平刀で軽く叩いていく。次に、屠殺人があらわれ、とどめをさす。次いで、供犠獣の解体、調理。並行して、祭壇前での、中国風芝居、タイ・ルーの舞踊、刀舞などの上演。チャオムアン、モームアン、銅像の前で祈る。各守護霊の祠の前で、それぞれのプリーストが祈り、供犠獣の肉などは、チャオルアン・ムアンラーや各守護霊に供えられる。チャオムアン、モームアンの祈りに次いで、村人達による共食。午後は、カプ・ルーや、マークコーン（毬投げ）の他、椅子取りゲームなどのレクリエーション（主婦が中心）、男性は闘鶏など賭博。夜は、チャーン・カプによるカプ・ルー、老人達によるドントゥリー・プンムアンの演奏。

三日目：九時より、ムアンラーとは別のムアン、ムアンウーから来たウーという守護霊に対する儀礼が、N村内のウーの祠の前で行われ、豚一頭を供犠。調理の間、N村のチャーン・カプがモームアンの宿所などで歌う。供犠獣の肉はウーに捧げられ、人々の共食へと続く。午後二時、健康と長寿を祈るため、モームアンとチャオムアンにスークワン（魂強化）儀礼。三時すぎ、チャオムアンは、D村へと帰り、モームアンは、村人に送られて帰路につく。

［1990年12月　N村］

へ村

移住史

現在、ミャンマー・シャン州の、雲南西双版納との境界付近にあるムアン・へから移住。

精霊祭祀

儀礼では、チャオムアンへの子孫がチャオムアンの役を演じる。ムアンへからもってきたとされる、長い刀をチャオムアンの印として所持している。ムアンへからは、パヤー・インタウィチャイがナーンに移住し、ナーンピムパーと結婚した。現在のチャオムアンはノーラー・インサーイである。インサーイという姓は、へ村のみにみられる。　［1996年３月へ村］

c．プア郡

ロンゲー村

移住史

ムアン・レーン（ムアン・リン）のチャオムアン、パヤーセーンムアンケーオは、ムアン内での内紛に耐えられず、４人の将軍、ターオケーオパンムアン、ターオワンナ、ターオレクファイ、ターオトゥーの応援を得たが、耐え切れなかった。

そして、民と共に逃亡し、水を湛えた水路のある辺りに村を建てた。肥沃な土地であったので、ローンナムゲーと名付けた。しかしながら、あまり時間がたたないうちに、チャオルアン・パヤーリン（パヤームアンケーオ）も亡くなった。人々は、彼の祠を建てて、その霊を招いて慰撫した。ロンゲー村の人々は、以後、毎年、この霊を供養しているのである。10年のちに、彼の霊は、女性の霊媒に憑依した。仏暦2529年、村人が共同で、チャオルアン・チャーンプアクの記念の銅像が建てられている。

精霊祭祀（北タイ暦８月）

ベーテル、ココナッツ、種々の果物、菓子、ゆでた鶏６匹、水、たばこ、ろうそくを必要とする。線香は必要としない。水牛や牛など大きな動物の供犠はなく、鶏とかあひるといった小さな動物を供犠する。祠、象の飼育者の姿のモニュメントの近くに象を繋ぐ柱がある。村人はそこにさとうきびを供える。10時、カオチャムと古老２－３人が霊を招く詞を述べ、祠のチャオルアンの寝床の前のろうそく２本に火をつけ、供え物を取りにくるようにと招く。この時、豚のラープと鶏肉のトムヤムを供え、チャオルアンを招き終えて後、村人もこうした食事を昼食としてとる。午後、コンソン（霊媒）に霊が降りる。普通はチャーンソー（北タイ民俗歌謡の歌い手）の歌（マノーワンと呼ぶ）によって霊が招かれるが、カオチャムの詞で招かれたりもする。初めに、チャオルアン・ドーイ・プーカー（プア郡にあるプーカー山の守護神。チャオルアン・チャーンプアク・ガーキアオの友人）が招かれ、チャオルアン・チャーンプアク・ガーキアオを招くように促される。チャオルアン・ドーイ・プーカーがコンソンの体を離れ、チャオルアン・チャーンプアク・ガーキアオがコンソンの体にはいる。コンソンは、緑色の布をし白色の袖の長い着物に着替える。コンソンの立ち居振る舞いはも変化し、ベーテルナッツを好むようになる。チャオルアンチャーンンプアク・ガーキオに、村人の様々な悩みの相談をお願いする。例えば、健康上の問題、熱や痛みなどの問題などである。死にまつわることもある。夫婦の問題、宝くじ、将来のことなど運命で決まっていることについては、チャオルアンは、相談に乗らない。また、もし、占いが吉とでれば、特に努力をする必要がなくなり、もし

凶であれば、自らの意志をしっかり持たなくてはいけないなどとアドヴァイスする。チャオルアン・チャーンプアク・ガーキオがコンソンの体を離れて後は、村人たちは、手首に糸を巻いて、コンソンの魂を呼び戻す。チャオルアン・チャーンプアク・ガーキオの霊を招くコンソンは通常のコンソンとは異なる。というのは、他の人物の霊が憑依することがなく、また、この儀礼の時に限っての活動であるからである。

[Khana Naksuksa Parinya Tho Mahawithayalai Chiang Mai 1987]

d．トゥンチャーン郡

トゥンスン村

移住史　ムアンラーから移住したとされる。

精霊祭祀　ピー・ムアンとしてチャオカーカーンを祀り、ピー・バーンとしてチャオポーコームーレックを祀る。　[1994年３月　トゥンスン村]

（６）中国の社会主義化に伴って難民としてタイに移住したタイ・ルー（1950年代に移住）

a．チエンラーイ県メーサイ郡

マイルアンコン村

移住史　国民党と共に逃亡した者を中心に、様々なムアンの出身者からなる。

精霊祭祀

チャオルアンカムデーンを祀る。チャオルアンカムデーンは、シャン州のある場所より移住したと考えられている。また、シプソーンパンナーのツェンフン最大の守護霊であったとも考えられている。メーサイに居住しようとする者は、チャオルアンカムデーンに許しを請わねばならない。タイ・ルーの人々は、チャオルアンカムデーンは、メーサイというムアンの守護霊と考えている。メーサイには、タイ・ユアンの人々も住んでいるが、彼らは、チャオルアン・カムデーンは、チエンダオの洞窟に住む、ランナー最大の守護霊を指すと考えている。また、雲南系漢人もまたチャオルアン・カムデーンを祀っているが、彼らは、商売繁盛の神と考えている。一つの神格が祀る主体によって様々に捉えられているが、このことは、メーサイの複合的な社会・文化状況を象徴している。　[1992年３月マイルアンコン村]

（７）ラオスの社会主義化に伴って難民としてタイに移住したタイ・ルー

(1970年代、ラオス、サイヤブリー県のチエンロム、ホンサ、ムアングンより移住)

ナーン県　トゥンチャーン郡　ポン区　ホイコン村　マイ村　ライトゥン村

[Songsak Prangwatanakun　1986]

（8）かつてはタイ・ルーであり、現在は“そうではない”と表明するもの

a．ナーン県　ターワンパー郡

クワ村

クワ村は、タイ・ユアンの村であり、皆、北タイ語ナーン方言を話している。ここの村人は、様々な地域からの移住者の集まりであり、シプソーンパンナーやラオスに起源を持つ精霊も祀られているが、そうした精霊の信奉者も、ほとんどが、自らをタイ・ユアンとアイデンティファイしている。チャオルアン・ムアンハムという守護霊は、シプソーンパンナーのムアンハムを故地としているが、その信奉者も、タイ・ユアンと一緒に長く住んでいるうちに、タイ・ユアンに変化したと考えている。以下、チャオルアン・ムアンハムの信奉者に限っての移住史とチャオルアン・ムアンハムの儀礼の実際について記す。

移住史

チャオルアン・ムアンハムは、最初、シプソーンパンナーにいたが、戦争によってクワ村に移住してきた。チャオルアン・ムアンハムは軍隊を率いて逃げてきた。子どもが増えすぎたので、殺すことを計画し、子どもを田の中において、水をいれて溺れさせた。３人の女の子が助かった。一人は、ウイ、一人はインケオ、もう一人はポームという名であった。３人の女の子は、今のクワ村の中で、チャオルアン・ムアンハムの最初の血統となった。そして、他の地域へも散らばっていった。現在の司祭（カオチャム）はウイの子であるという。カオチャムの職は、おじから受け継いだ。

精霊祭祀

カオチャムは、精霊の祠を管理し、供養のスケジュールを決め準備する。その他、チャオルアン・ムアンハムを信奉する親族の中で、最年長の者としての役割を果たす。親族内の争いの調停や、精霊の供養を行う。チャオルアン・ムアンハムの祠は、カオピー（女性）の家にある。カオチャムは、チャオルアン・ムアンハムに、籾殻を手のひらに落とし、祈ってつまむ。これを偶数になるまで続ける。

チャオルアン・ムアンハムは、大きな力をもっている。以前、誰が過ちを犯すと、とりわけ供養の時に降りてきて憑依し、大声で「私はムアンハムから来た」と叫ぶような傾向があった。チャオルアン・ムアンハムは、外から嫁いできた女性を好む。供養は、３年に一度、一日一晩

行う（１月）。親族が子ども、大人に関係なく費用を集める。各家庭ごとに費用を供出し、黒豚一頭、黒鶏４羽を供犠の為に購入する。儀礼はカオピーの家で行う。ターレオを立て、立入り禁止区域を定める。儀礼中は親族以外は立入り禁止である。クワ村の者で禁を犯した者は罰金15バーツ支払う。　［1991年９月　クワ村］

2　北ラオスにおけるタイ・ルー

（１）分布の概況

a．ポンサリー県

ムアン・ウーヌア、ムアン・ウータイは、かつてシプソーンパンナーの領域であったが、19世紀における清仏戦争の結果、フランス領となり、今日でもラオスの領域内にある。タイ・ルー人口の多いムアンには以下のものがある。

ウーヌア、ウータイ、ガーイヌア、ガーイタイ、ブンヌア、ブンタイ

b．ルアンナムター県

［ムアンシン］（23カ村）

チエンチャイ、チエンユーン、チエンレー、チエンイン、チエンムン、ナー、ノーンム、シームン、ホイコット、ファーン、ナムダーイ、ヤーンピエン、ナムケーオノーイ、ティンタート、ソー、ナーカム、ムアンフン、ターパーオ、ドーンポーイ、モーム、カイ、ボーチエンチエーン

［ムアンローン］（８カ村）

ドーンチャイ、ムアンサ、チエンルンノーイ、チエンコックカオ、チエンコックマイ、ノーンカム、ドーンポーイ、ルアン

［ムアンカーン］（３カ村）

ムアンカーン、カオ、マイ

［ムアンナーレー（ター川沿い）］数カ村（詳細は不明）

［ヴィエンプーカー］

革命時に、ボーケーオ県に移住したものが多いので、２－３カ村。しかも、カムと一諸に住んでおり、純粋なタイ・ルーの村落はない。

［ルアンナムター］（３カ村）

ボーテーン、ナムトゥン、ホイキン

（ボーテーンは中国国境沿いにあり、中国側にあるムアンラーのボーハーンと共に、古くか

ら塩の産出で有名である）

c．ボーケーオ県

［ムアンウー（ポンサリー県）やシプソーンパンナー域内からの移住］（12カ村）

プン、ピモンシン、ドーンケーオ、トゥンセーンチャーン、マイプーカー、トゥンサムモーン、ピモントーン、ナムカロック、パークハオタイ、ダーン、ターファー、ドーンチャイ、この他ムアントンプン、ムアンムン、ムアンバークターの領域内に数カ村

d．ウドムサイ県

［ムアンサイ］（11カ村）

チェーン、ティン、ナーミー、ナーウェーン、ナーサーオ、ティアオ、ナーファム、マイ、ローンヤー、トゥンヒート、ローンサット

ムアンサイからムアンペーンに至る道程に、数カ村（詳細は不明）

［ムアンペーン］（19カ村）

ペーンルアン、ペーンカム、ターカート、ポーンサイ、ナープラーヌア、ナープラーイ、ナーメット、ナームーン、バーントーン、ソブロー、ナーウア、チエンレー、ヨー、ナーライ、パーンドゥー、ポーケーオ、ナー、ベーンボーン、ナーホイ

［ムアンフン］ウアトゥア、ナーレーン（２カ村）

［ムアンナーモー］　ナーモー（１カ村）

［ムアンクワー］　ナーヤーン（１カ村）

e．ルアンプラバーン県

［ウー川沿い］（12カ村）

ホイフェーン、ホイワン、コークン、ハードパーン、ホイファーイ、パークチェク、ドスワー、ラートターヘー、コーンダム、ホイロー、ハードコー、ワンレー

［ルアンプラバーン］（５カ村）

パーノム、プリック、ナーヴィエンカム、ナーオームドーイ、チエングン

f．サイヤブリー県

［ムアンピエン］（２カ村）

ドングン、セーンチャルン（人口の増加の為、土地を求めてムアングンから移住）

［ムアンホンサー］（３カ村）

ヴィエンケーオ、ナーラム、ナーパンカム

［ムアングン］

ナーウア、ナーヤーン、ルアン、チャイ、ティンドーイ、ドーンムン、ホーン、ドーンケーオ、ノーンウェーン、コーン、ピエンガーム、ディーミー

[ムアンコープ]

ムアンチエンホン、チエンロムは全てタイ・ルーの村落

以上 [Prachan Rakphong 1996]

（2）移住史と精霊祭祀

北ラオスのタイ・ルーに関しては、今後の調査に待たねばならない。現在の所、筆者が知りえているのは、ルアンプラバーン県のパーノム村の事例である。精霊祭祀は、革命後、ラオス政府が迷信として禁止しているが、近年、ムアンシンなどで復活しているという。

パーノム村

移住史（概要）

600 年程前、ファーグム王（ラーンサーン王国初代王）の王子、チャオウンムアンがシプソーンパンナー、チエンルンの王女ナーンケーオ・ティダーを娶った。この際、チエンルンから老若男女（男５００人、女５００人）が供として付き従っていた。その中には、ルアンプラバーン王を護衛する役割をもつ男性や、呪文に通じた人などがいた。また、男性は主として彫刻を、女性は織物を王家の為に行った。この他、歌や踊りを王家の賓客の為に行った（ラーマーヤナなど。この伝統は、近年まで続く。村長も、元パラク・パラム［ラーマーヤナ］劇のダンサー）。そのようなわけで、最初、王宮の近く（現在のムアン・スワーホテル）にナーヴィエンカム村を建て、次いでナーオームドーイ村［ワーオ山付近］を建てたが、村人の数が増えたので、より広い田を耕すことのできる今の地（メコン川の支流であるカン川の岸）に、王に頼んで移住した。人間の増加により、同じ川沿いに、ドーンケーオ村、プリック・ノーイ村、ボーヘー村の３村がパーノム村から分かれてできた。

（村長、シーチャン・チャンデット氏所有の由来書。ラーオ文字による。ルー文字によるものもかつてあったが、散逸）（　）内は筆者注　　[1993年８月パーノム村]

精霊祭祀

１９７５年の革命までは、村の守護霊に対する供養が行われていた（現在も非公式には行われている）。パーノム村の守護霊は、チャオポムホワ（別名、チャオカムウォン）である。毎年、６月から７月頃に供養。豚１匹、鶏４匹を供犠、菓子を４皿、５分から10分祭壇に供えて降ろす。この時、カプ・ルーが唱われる。チャーン・カプ（歌い手）はパーノム村に存在する

が、チャーン・ピー（横笛の吹き手）はプリック・ノーイ村から呼ぶ。また、ティーナンと呼ばれる巫女が酒を飲むと霊が憑依して、占いを行う（当たったり当たらなかったりする）。他村の例であるが、村長が次のような経験をしている。ティーナンである年老いた独身女性が歌い始め、それにたまたま男性が歌で答えた。人々は、女性に神が入って、男が答えるのを許したのだといった。独身の女性に男が誘いかけるのを神が許したという解釈。パーノム村から分かれてできた３カ村は、それぞれの守護霊を祀っている。　　[1993年８月パーノム村]

まとめと展望

以上、北タイに分布するタイ・ルーを中心に、北ラオスの状況もまじえ、現在知りうる限りの移住と精霊祭祀に関する情報を記述した。

移住に関する情報からは、移住の歴史的状況を、以下のように、整理することができる。

a．シプソーンパンナー東部から、北ラオスを経由し、ナーン、チエンカム（現パヤオ県）へ移住したもの
b．シプソーンパンナー西部及びミャンマー・シャン州から、現在のチエンマイ県、ランパーン県などに移住したもの
c．北ラオス、ポンサリー県ムアン・ウーからチエンコーン（現在チエンラーイ県）へ移住したもの
d．中国及びラオスの社会主義国化によって、ある種の難民として移住したもの（現在のチエンラーイ県及びナーン県）
e．シプソーンパンナーの主に東部からラオス北部へ移住したもの
f．シプソーンパンナーの一部であったものが、清朝のよってフランスへ割譲されたことによって、現在ラオス領になっているもの

このうち、a、bは主として、18世紀末のカーウィラのランナー王国再興期の入植捕虜に由来し、cは19世紀雲南系漢人の圧迫により移住したものである。eは、シプソーンパンナーの内紛などの原因によるが、aも、多くはこうした経過で逃亡した者を北タイで受けいれたことに由来している。

難民としての移住を除いては、移住の殆どが、18世紀から19世紀にかけての、北タイを中心とする地域の変動を契機としている。この時期は、英仏植民地勢力の侵入による国境確定前夜

である。国境確定以前に北タイに移住したタイ・ルーは、国境確定、地方土侯の廃絶を経て、タイという国民国家が形成される中で、タイ国民として一元化されていく。今日、タイ国民は、ＩＤカードを持ち、少数民族もそれぞれの民族名が記されているが、タイ・ルーの場合は、タイとのみ記されるようになるのである。

19世紀、地方土侯は、移住した様々な出自のタイ諸族と関係をもったが、ルーというのは、同一地域に居住することになった、種々のタイ諸族間で用いられた、出自を示す（シプソーンパンナーを故地とする）呼称である可能性がある。例えば、ナーン県ターワンパー郡の場合、19世紀に、ナーン土侯の開拓政策によって、出身の異なる様々なタイ諸族が入植して同一地域に住むこととなったが、言語など文化的差異に従い、地域における差異化の体系のあり方ができたと考えられる。シプソーンパンナー（ムアン・ルー）から移住したものはルーと呼ばれ、ラオス・シエンクワーンから移住したものはラーオと呼ばれ、元来、ナーンに住んでいたものは、単にタイと呼ばれた。前近代においては、ムアンもしくはムアン連合の首長との関係性が、タイ諸族にとって重要な対他認識の主要なメルクマールであったと考えられ、従って、移住後もかつて従属したムアンもしくはムアン連合との関係性が強調されたと考えられる。

ナーン県ターワンパー郡クワ村の事例のように、タイ・ユアンとの混住によってタイ・ルーとしてのアイデンティティーを失ったものもある。しかしながら、後述するように、現在、観光化、村起こしなどでタイ・ルーという呼称を前面に出す動きも盛んである。しかしながら、これは、あくまで国民国家形成の中で、タイ国民への一元化が前提となっている。タイ・ルーというのは、山地民族のように、ＩＤカードに民族名が記されるような国家認定の呼称ではない。タイ・ルーの主張は、前近代から連続する地域レベルでの差異化の体系に基づいて行われているのである［馬場 1996b］。

次に、本稿で記述した精霊祭祀の資料の中にみられる特色を探ってみたい。

本文で記述した北タイ、タイ・ルーの精霊祭祀の資料の中には、近年の精霊祭祀の変化の様態を示唆するものがある。例えば、1980年代に入ってより、とりわけ、ラオス国境に近いナーン県、パヤオ県で精霊が偶像化されていく現象をみることができる。これは、パヤオ県チエンカム郡のマーン村（仏暦2527年＝西暦1984年）、ナーン県ターワンパー郡Ｎ村（1985年）、同県プア郡ロンゲー村（仏暦2529年＝西暦1986年）に明らかである。チエンカム郡のペート村、チエンバーン村のモニュメントも資料中に明らかな説明はないが、共に1980年代の建立である。このことは、1980年頃まで続いた、タイ国軍と共産ゲリラとの戦いが国軍の勝利に帰し、戦勝記念碑が各地に建てられたことと、或いは関係をもつかもしれない。この点に関して現在、明

確な証拠があるわけではない。しかしながら、ナーン県N村の儀礼で１９８０年代に歌われたカプ・ルーの歌詞に、守護霊に「国境の防備」を祈る下りがあることなどを考えると［馬場 1996a］、検討すべき問題であると思われる。

また、資料の中には、精霊祭祀のイベント化の動きを示すものがある。資料中では、次のような例があげられる。パヤオ県チエンカム郡のマーン村の儀礼で、１９８９年以降、チャオムアンの役割をする人物が登場し、同郡のウェーンパッタナー村では、文化保存の為の「伝統家屋」が設けられ、チャオムアン役の人物の宿所となる。このチャオムアンも、同村と近縁関係にあるナーン県N村での儀礼を模して始められたといわれる。

精霊祭祀では移住の歴史が表現されるが、こうしたイベント化によって、歴史に対する意識が明確化され、時に再編されて強調されることがある。この点について筆者は、以下のような事例について言及したことがある。

ターワンパー郡のムアンラーから移住した３カ村の例：儀礼のイベント化の中心となる、政治的・経済的に優勢な村に多くの利益がもたらされ、この村と儀礼の重要な役割の担い手を有しつつも貧困な状態の村との間に心理的葛藤をもたらしている。結果、後者は、村の歴史的人物のシンボルを建てて独自の儀礼を始め、自らの移住の歴史を描くに至った。ここには、農村開発の不均衡という状況の中で、歴史に対する意識が明確化されて再編されるプロセスが認められる［馬場 1995 ］。

チエンラーイ県メーサイ郡及びパヤオ県チエンカム郡の事例との比較：メーサイ郡のタイ・ルーは、新中国成立によって国民党と共に国外に逃亡した者を中心に、様々なムアンの出自の者が混住しており、新たな守護霊儀礼の創造がみられる。チエンカム郡では、その大部分の村落がタイ・ルーであるが、それぞれの村が異なったムアンを出自としている。近年、チエンカムの大半の人口を占めるタイ・ルーをシンボルとして地域起こしをする動きがあるが、そこでは守護霊儀礼は利用されない。守護霊儀礼は、出身ムアンを強調するので、チエンカムのタイ・ルーの中での相互の差異を示すからである。従って、仏教儀礼において、タイ・ルーの芸能や織物をアピールすることで、チエンカムの全てのタイ・ルーの参加のもとでの地域起こしを行うことが可能となる［馬場 1993a］。これらは、出身ムアンとの歴史的関係を越えた、シプソーンパンナーとの歴史的関係が強調され構築されている。「ルー」という呼称の強調は、こうした歴史意識の再編を示しているのである。

さて、開発とかかわるこうした動きは、更に、近年、冷戦構造の崩壊に伴ってにわかに盛んになってきた、国境地域の開発とのかかわりの中で考えていく必要がある。現在、中国、ミャ

ンマー、タイ、ラオス４ヵ国による共同開発が進められており、そこでは、４ヵ国をめぐる道路が計画されている。その開通は、メコン川の利用とあいまって、４ヵ国に分布するタイ・ルーの地域を結ぶ格好となる。タイ・ルーの本拠地西双版納は観光開発は進み、その外のタイ・ルーの分布地域では、織物などの観光への利用が更に進むであろう。近年、タイ・ルーの織物は、独特のデザインで注目を集めており、とりわけ観光資源の少ないラオスでは、格好の売り物となると思われる。例えば、ナーン県に接したラオス、サイヤブリー県ムアングンのタイ・ルーの織物は、ムアングン様式としてよく知られており、ナーンの織物にも影響を与えている。ナーンからムアングンに至る道は、古都ルアンプラバーンへと続いており、古都と織物を訪ねる新たな観光スポットとなる可能性も秘めている。

近代以後、国境によって分断されたこの地域であるが、近年のボーダーレス化によって、タイ・ルーを含む諸民族は、新たに形成されつつある「地域」の中で運命を共にしようとしている。この「地域」の近年の開発はまた、動脈として通るメコン川の開発にも代表されているが、ともすれば、過度の開発が環境破壊に結び付く可能性も否めない。複数の国家間にまたがる、この新たに生成されつつある「地域」は、国家間の利害を越えた「河川流域共同体」として構想されるべきものである。国家を越えて生まれつつある新たな「地域」は、環境、開発、文化をめぐる様々な問題を我々につきつけている。

注記

(1) ワーは腕を広げた長さ、マイは木を示す。木の棒の両端を両手で抱えるようにして持って占う内容を神に告げ、もう一度、同じようにして棒を持ち、棒が長くなれば（両手を広げたよりはみだせば）神の同意が得られたとする占い。

(2) N村のチャオルアン・ムアンラーは、チャオファー・プーカムを始めとする親族の守護霊からなるパンテオンの頂点に位置する。ノーンルー村では、上下関係が逆転している。

(3) 儀礼において集合する精霊の名称については［馬場 1993b］参照。

(4) ホイメン村についての詳細は、［Chuliphon Wimukatanon 1989］参照。なお、筆者が閲覧できたのは、メーサイ郡サンブンルアン村に存在するホイメン村の文書の写しである。

(5) とりわけプア郡の村落には、複数の村落からの出身者が混住している場合が多い。ここでは、ラタナポン氏の論考の表を参照したが、複数の村落が記載されている場合、その筆頭にあげられているものを示した。なお、ターワンパー郡の３カ村は、仮名になっている。筆者は、この３カ村を主な調査対象としており、過去報告した数編の論考で仮名で扱ったので、そのままにした。

(6) 詳細は馬場［1993b、1995］。集合する親族の守護霊についても［馬場 1993b、1995］参照。

文献

馬場雄司

1993a 「北タイ、タイ・ルー族の守護霊儀礼と仏教儀礼－『伝統』の創造とエスニシティー」『パーリ学仏教文化学』6: 51-68。

1993b 「タイ・ルー族の移住と守護霊儀礼」『社会人類学年報』19: 133-147。

1995 「北タイ、タイ・ルー族の守護霊儀礼とその社会的背景－移住の記憶をめぐって」杉本良男編『宗教・民族・伝統－イデオロギー論的考察』南山大学人類学研究所叢書Ⅴ、pp. 83-115。

1996a 「北タイ、タイ・ルー族の儀礼と歌（カプ・ルー）－農村開発と歌の役割の変化」国立民族学博物館「音楽」共同研究編・藤井知昭監修『「音」のフィールドワーク』、pp. 284-301。

1996b 「北タイ、タイ・ルーの移住・定着過程－ナーンにおける盆地開拓史とのかかわりで」『同朋大学論叢』73: 61-98。

Chuttamat Somkanok and Phiset Anukun

n.d. Suksa Kanplianplaeng khong Sankhom lae Wattanatham Tai-Lue, Chiang Mai（『タイ・ルーにおける社会・文化変容に関する調査報告』）.

Chuliphon Wimukatanon and Ron Renald

1987 Kanplianplaeng lae Kanprapprungtua khong Chao Tai Lue thi Amphoe Maesai Changwat Chiang Rai, Chiang Mai: Mahawitthayalai Phayap（『チェンラーイ県メーサイ郡のタイ・ルーにおける変化と適応』）.

Chuliphon Wimukatanon
1989 Klumthongthin kap Kanmisuongruom khong Prachachon nai Kanphattana Chonnabot: Karanisukusa Ban Huaimeng Amphoe Chiang Khong Chanwat Chiang Rai, Witthayaniphon Parinya Tho, Krungthep: Mahawitthayalai Sinlapakon (『地域開発における地方集団と民衆参加ーチェンラーイ県チェンコーン郡ホイメン村の事例』).

Khana Naksuksa Parinya Tho Sakha Phasa lae Wannakam Lanna Mahawitthayalai Chiang Mai
1987 "Phithi Buongsuong Chaoluang Chang Phuak Ga Khiao khong Chao Tai-Lue Ban Rong Gea Amphoe Pua Canwat Nan," in Un Chutima(ed), Phithi Buongsuong Duang Winyan Banphachon chak Sipsong Panna(phi puya), Chiang Mai: Sun Watthanatham Chiang Mai, pp. 42-53 (「ナーン県プア郡ロンゲー村のタイ・ルーにおける守護霊祭祀ーチャオ・ルアン・チャーンプアク・ガーキオ」).

Kraisi Ninmanahaeminda
1965 "Put Vegetables into Baskets, and People into Towns," in Hanks, Lucian M. et al(eds), Ethnographic Note on Northern Thailand, Ithaca: Cornel University Data Paper No.58, pp. 6-9.

Prachan Rakphong
1987 Kansuksa Muban Tai-Lue nai Changwat Lampang, Chiang Mai: Witthayalaikhru Chiang Mai (『ランパーン県におけるタイ・ルー村調査報告』).

Prachan Rakphong
1996 "Kansuksa Watthanatham Phunban Tai-Lue nai Phak Nua khong Satharanarat Prachathipatai Prachachon Lao," in Proceedings of the 6th International Conference on Thai Studies, Theme 4, Chiang Mai, pp. 265-295 (「ラオス人民民主共和国北部におけるタイ・ルー固有の文化」).

Rattanaphon Setakun, Chuliphon Wimukatanon and Ron Renald
1984 Kansamruat Thang Chattiphan khong Chonphaothai Phunthi Lum Maenam Ping Changwat Chiang Mai, Chiang Mai: Mahawitthayalai Phayap (『チェンマイ県ピン川流域におけるタイ系諸族に関する民族調査』).

Rattanaphon Setakun
1993 Chak Sipsong Panna Su Lanna: Chao Tai Lue nai Changwat Nan, Paper presented at the Seminar on Tai Studies, Chak Kwansi su Yunnan thung Lanna, Chiang Mai: Mahawitthayalai Phayap (「シプソーンパンナーからランナーへーナーン県におけるタイ・ルー」).

Somsak Prangwatanakun
1986 Chao Tai-Lue nai Lanna: Kho Sanket Buangton, in Arunrat Wichienkaeo (ed), Tai Lue : Chiang Kham, Chiang Mai: Chomrom Lannakhadi, Witthayalaikhru Chiang Mai (「ランナーにおけるタイ・ルーー予備的考察」).

[付記] 本稿の資料は、1990年から1991年にかけて、文部省アジア諸国等派遣留学生としてチエンマイ大学社会科学部に滞在した期間及び、1996年まで断続的に行われた調査によって得られた。1993年のラオス調査は、文部省科学研究費による調査「東西音楽交流学術調査」(国立民族学博物館教授[当時]・藤井知昭)の一環として行われた。